

香美町 農委だより

No. 47
令和8年9月25日発行

発行 香美町農業委員会
編集 香美町農業委員会
情報部会

兵庫県美方郡香美町香住区香住870-1
電話 0796-36-0846



【香住の二十世紀梨 全国へ】

本町を代表する特産品であり、さわやかな酸味と上品な甘さ、そしてみずみずしくシャキッとした食感で長年愛され続けている「二十世紀梨」が全国のファンの元へ届けられました。

農家は、朝露が残る早朝から一つ一つ丁寧に実を確認し、傷がつかないように慎重に収穫を重ねました。選果場ではセンサーによる糖度やサイズの厳密なチェックが行われ、次々と箱詰めされていきました。

今年は、例年に比べるとやや小ぶりだったものの、糖度は過去5年で一番高く、甘みを凝縮したおいしい梨に仕上がったとのこと。

梨シーズンは、この後「しんこう新興」、おうしゅう「王秋」、おくてといった晩生の品種へと続いていきます。ぜひご賞味下さい。

◆◆◆ 本号の主な記事 ◆◆◆

- ◆頑張っている農家の皆さんの声…………… P2～3
- ◆編集後記…………… P4
- ◆シリーズその25 我が村の自慢…………… P4

我が村の自慢

シリーズ
その25

「空の駅」展望施設と 「余部クリスタルタワー」

「道の駅あまるべ」へ足を運ばれましたか。ここは観光客だけでなく、地元の宝物が詰まった場所です。

最大の魅力は、かつての余部鉄橋の歴史を今に伝える「空の駅」展望施設と、そこへ導くガラス張りのエレベーター「余部クリスタルタワー」です。地上約40メートルまで一気に上がる浮遊感と、空の駅から望む眺望は唯一無二。そこは日本海の青いパノラマと、心地よい潮風が迎えてくれる特等席で、年間約12

万人のお客様にお越しいただいています。

また、「余部クリスタルタワー」は日没から午後9時30分までライトアップされます。春はグリーン、夏はブルー、秋はオレンジ、冬はホワイトと、季節ごとに姿を変えてご覧いただけますが、時折「レインボー」のライトアップも現れます。見ることであれば、ラッキーな隠れた魅力です。

展望施設の下では、空の駅のカメの駅長「かめだそら」ちゃんが迎えてくれます。午前9時30分～10時30分と午後3時～4時に1回ずつ、お散歩のお仕事をしています。

道の駅では、地元農産物の販売や、年間約4千個を売り上げるここにはしかない大人気商品「香住ガニバーガー」を提供しています。ほかにも、ランチやおやつに最適なメニューが豊富ですので、この週末はご家族やご友人と、身近にある地域の誇りを体感しに、ぜひお出かけください。

今後も「余部鉄橋」が香美町のシンボルとして輝き続けるように尽力してまいります。

香住区余部 川本 雅弘



編集後記

昨年に引き続き、今年も厳しい暑さが続いております。

さらに今春からは、国際情勢の影響に伴う燃料費や農業資材の高騰など、私たち生産者を取り巻く環境は一層厳しさを増しており、かつてなく大変な状況下での農作業の始まりとなりました。

さて、今号では地域の農業に関する話題や活動の様子をお届けいたしました。

農業を取り巻く環境は目まぐるしく変化していますが、このような時だからこそ、地域の皆様と力を合わせて農業を守り、将来の発展へとつなげていくことが何よりも大切だと感じております。

これからも皆様にとって親しみやすく、お役に立てる情報をお伝えできるよう努めてまいります。

今後とも、紙面へのご意見やご感想をお寄せいただけますと幸いです。

香美町農業委員会

情報部会長 米田 和弘



頑張っている 農家の皆さんの声

「狩猟初日を経て無我の境地へ」

香住区沖浦 大西 克典さん

「狩猟・有害捕獲に対しての、思想、感情、概念について、また、どのような気持ちで猟に臨んでいるのか教えてほしい」という執筆依頼を受け、筆を執っている。

猟師を志したきっかけは、入院中に耳にした農作物の獣害被害の相談であった。九死に一生を得る経験を経て、「残された人生を困っている人のために使いたい」という強い思いが芽生え、獣害対策に取り組み猟師としての道を歩むことを決めた。

現在は、「無我」であるから「無心」である。どのようにしてこのような感情に至ったのか、猟師として初めて



左手に激痛が走る。噛まれたのだ。頭を掴んで外そうとするがはずれない。思い切り手を引き抜く。左手小指から鮮血が滴り落ちる（後に病院で八針の負傷。タオルを巻き止血を試みるが、どんどんタオルが赤く染まってゆく。助け

狩猟に臨んだ日のこと、感情に溢れかえっていた日のことをつづることとする。

令和4年11月21日、浦上地区山中にて、大西氏…

「アナグマがぐくりわなに掛かっています。放獣する方法を教えてください。」

先輩猟師…

「初心者の君には無理だ、止め刺し（仕留める）をしてわなを外せ」

先輩猟師との電話によるやりとりである。

初めての狩猟であり、殺生に戸惑いが生じたため、放獣を試みた。

ワイヤーを引きよせ、ネジをゆるめようとした瞬間、

はこない。急いでリュックからテープを取り出し、タオルごと他の指も巻き込んで、ぐるぐる巻きにする。恐怖と痛みで体が震える。頬に冷たいものが伝う。

5分ほど経ったであろうか、覚悟を決める。仕留める為のバットを袋から取り出す。左手は使えない。右手1本で、アナグマの頭部をめがけバットを振り下ろす。打ち込みが浅かったのかアナグマは微動だにしない。2発、3発と打ち込む。涙が止まらない。アナグマの口から赤いものが流れる。傷の痛みを心の痛みが勝る。その場にへたり込んでしまう。1時間、2時間、その場を動くことができなかった。これが忘れられない初めての狩猟であった。

次の日から、私は多くの寺を巡り、狩猟に対しての悟りを得ることになる。

とある寺の僧侶は私に言う。

「殺生に対して罪悪感を持つあなたは良心がある。しかし、狩猟の際、この良心（罪悪感）は雑念となり、あなたを危険にさらします。野生において、獲物を仕留めにかかる獣は一切の雑念を排し、無心状態で目標物にまっしぐらのはずです。狩猟時は、自然界の掟に従うべきです。」と。

その日から、獣と同じ「無心」を体得するため、狩猟時以外にも山中に身を置き、無心となるための経験を積んだ。

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで、私は、猟友会香住支部所属有害鳥獣捕獲班の一人として活動した。最終日の令和6年3月31日。1年で150頭の鹿を仕留め、遭遇したツキノワグマをも撃退してしまふ、揺るがない私の姿があった。

「人の役に立つ為に」との思いで始めた猟師も、いつのまにか「無心」で向き合う自分があるが、どこかで人の為になつていればと願う。

令和8年9月、現在も有害鳥獣捕獲班の一人として、害獣と対峙している。

「米づくり、 ピーマンづくり、 自分づくり」

村岡区高井 文堂 雅章さん

私はこれまで農業には興味も関心も無く、楽しさがわかりませんでした。しかし、農家の方々のおかげで

おいしいお米や野菜を食べられているので、いつも感謝をしています。また、農業してる人はすごいと感心するばかりです。しかし、絶対自分は農業に携わる事はないだろうとこれまでは思っていました。

そんな私がひよんなことから専業で農業を始めて2年目になりました。昨年は米づくりのみでしたが、今年は新たにピーマンの本格栽培にも挑戦しています。

米づくりについては、先祖代々受け継がれてきた田んぼに加え、新たに規模を広げた田んぼが基盤でした。さらに父という先生が身近にいるという恵まれた環境によってスムーズに米づくりを始めることができました。

長年の経験を誇る父の助言に対し、「本当にこの作業



が必要なん？」「こうした方がいんじゃない？」など、親子である事をいい事にド素人の私がこうじゃげに言いながら作業する事も多々あります。

また素直に仕事せんかったなあと反省しながら「やっぱり父の言う事が正しかったなあ」「父の言ってた意味がやっと分かった」「俺の意見も少しは正しかったやん」などと思うことがあります。

ピーマンの本格栽培については、私も父も初挑戦なので、有識者の方々の助言をいただきながら、まずはつべこべ言わず教科書通りに取り組んでいます。

私が「やってみたい」と言った事なので、まずは自分自身が作業の全てを経験するようにしています。成功も失敗も経験することで、今後の作業の役に立つことに加えて、将来誰かに手伝ってもらったときの確かな指示や説明ができると考えています。

そんなふうに向き合っているうちに愛着も増し、ふと、ピーマンに向かって「おっ、君いいよ。その調子で成長してね。他のみんなもこんな感じで頼むよ」など声をかけている自分がそこにいました。

去年の失敗を教訓に作業し

たり、教科書通りにしても上手くいかなくて悩んだりするけど、「なんでだろう？」「じゃあ今度はこうしてみようかなあ」などと思索しながら、より良い米やピーマンを作るために日々試行錯誤することができ農業が楽しいです。

「おいしいお米 コンテストが 教えてくれた 我が家の土地の 力と感謝の心」

小代区神水

田中 憲二さん

私とおいしいお米コンテスト（以下「コンテスト」という）との出会いは、令和元年に村岡体育館で開催された第1回大会でした。その時は出品者ではなく、催し物として実施された「飯ごう炊飯のふるまい」へのボランティアとして参加しました。手作りストーブで火を起こし、パンダナを頭に巻き、エプロン姿で「飯ごうを炊くおじさん」として参加したのが今でも楽しい思い出です。

初めて出品したのは、令和3年の第3回コンテスト。神水地区の農業者で組織する団体の代表者を引き受け、周囲に出品を呼びかける立場になったことをきっかけに、これまで受け身だった姿勢から「まずは自分から動こう」と我が家自慢のコシヒカリを出品してみました。すると、食味総合評価で10位タイとなる高得点をマークし、驚いたことに一次審査を通過しました。最終的な特別賞には届きませんでしたが自分の作ったお米が上位にあることを知り、大きな自信になりました。

令和4年の第4回コンテストにも出品しました。吉本興業の笑い飯・哲夫さんをゲストに、Kiss FM KOBÉのサウンドクルー・藤原岬さんを進行役に迎え、町をあげた盛大なイベントでした。お米の魅力が大きく発信されたこのコンテストで、私は初めて農業委員会長賞という栄えある賞をいただくことができました。



その後も出品を続け令和5年、6年、そして令和7年と、気づけば5年連続で一時審査を通過しています。

令和6年のコンテストでは、2度目の農業委員会長賞をいただきました。コンテストを通じてお米の美味しさが「数値化」されることで客観的な指標を得ることができ、何より米作りの大きな励みになっています。

「大した努力もしていないのに」と恐縮する気持ちもありますが、これは現在耕している土地がコシヒカリと最高に相性がいいということなのだと感じています。この素晴らしい土地を与えてくれた巡り合わせに感謝しながら、これからもこの土地、そして愛する我がふるさととの稲穂のある美しい景色を守り続けたいです。